様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ１９９６２

研究課題名（和文）日本哲学の4つの方向性：1935年前後に注目して

研究課題名（英文）Four Directions in Japanese Philosophy: Focusing on the Period around 1935

研究代表者
織田　和明（ODA, Kazuaki）

大阪大学・大学院情報科学研究科・特任助教（常勤）

研究者番号：３０９６３８１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では西田幾多郎、田辺元、九鬼周造、岩下壮一、中井正一らの哲学の研究に取り組んだ。本研究は以下の8要素からなる。①九鬼周造と中井正一の思想の比較研究②九鬼周造が岩下壮一と亀代に寄せる未練の情に注目した偶然性の研究③日本哲学の観点から檜垣立哉の哲学の研究④九鬼周造と田辺元の哲学の比較研究⑤中井正一の技術哲学の研究⑥西田幾多郎の「実在」についての研究⑦九鬼周造の人間学の研究⑧海外の研究者とのネットワーク構築。これを通じて日本哲学は日本哲学は「絶対無」「実存」「必然」「偶然」などをめぐる哲学者間の議論を通じて形成されていることを示した。日本哲学は今なお着目するべき多様な議論の宝庫である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本哲学研究は近代日本の人文学の重要な達成であるが、その内実は十分には解明されていない。本研究は当時の日本の哲学界の中心にいた京都学派の西田幾多郎と田辺元、そして彼らからはやや距離を取って実存の哲学の系譜を形成した九鬼周造とその後継者中井正一の四者に注目することで、日本哲学は思想的ネットワークの中で互いに議論を闘わせながらそれぞれの研究を深めていたことを示した。そして日本哲学は現代においてもさらなる展開が可能な議論の宝庫であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I studied the philosophies of Nishida Kitaro, Tanabe Hajime, Kuki Shuzo, Iwashita Soichi, Nakai Masakazu. This study consists of the following eight elements. 1) Comparative study of the philosophies of Kuki Shuzo and Nakai Masakazu. 2) A study of coincidence focusing on Kuki's unfulfilled feelings toward Iwashita Soichi and Kameyo. 3) A study of the philosophy of Higaki Tatsuya from the perspective of Japanese philosophy. 4) A comparative study of the philosophy of Kuki Shuzo and Tanabe Hajime. 5) A study of the philosophy of technology of Nakai Masakazu. 6) A study of "real" of Nishida Kitaro. 7) A study of anthropology of Kuki Shuzo. (viii) Networking with overseas researchers. Through these studies, I have shown that Japanese philosophy has been formed through discussions among philosophers concerning Absolute Nothingness, Existence, Necessity, and Contingency. We can find many important philosophical ideas in Japanese philosophy.

研究分野：哲学

キーワード：日本哲学　西田幾多郎　田辺元　九鬼周造　岩下壮一　中井正一

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

従来の哲学研究を覆っていた西洋中心主義を乗り越える世界哲学への機運が広がりつつある中で、日本哲学への注目も世界的に高まっている。しかし現在の日本哲学研究は「西田研究」「田辺研究」といった個々の哲学者を集中的に取り扱う研究が多く、昭和前期の日本哲学は有力な哲学者たちが、思想的ネットワークの中で互いに議論を闘わせながらそれぞれの研究を深めていたことが見逃されていた。

２．研究の目的

本研究は、当時の日本の哲学界の中心にいた京都学派の西田幾多郎と田辺元、そして彼らからはやや距離を取って実存の哲学の系譜を形成した九鬼周造とその後継者中井正一の四者に注目して 1935 年前後の日本哲学のネットワークの中心部を明らかにすることを目的とした。これらの思想は戦後に西田・田辺を継承する右派の道徳教育復活運動の、中井を継承する進歩派知識人の様々な市民運動の、理論的基盤となっていく。本研究によって明らかにされる思想の文脈は戦後日本の市民の実践の研究を準備するものであり、戦後思想への連続性を視野に入れた研究を目指した。

３．研究の方法

西田、田辺、九鬼、中井の 1930 年代のテキストを、当時の日本哲学の議論の焦点である「無」「実存」「偶然」「必然」に分析し、四者それぞれの思想の特徴を浮き彫りにする。西田と田辺は絶対無をその哲学の核心に据えつつもその思想に偶然の余地を残す西田と、絶対弁証法によって必然化することに強くこだわる田辺の間には差異がある。また九鬼と中井は実存、つまり存在するものをその思想の核心に据えつつも、偶然を最重要視する九鬼と偶然から必然への転換に重きを置く中井の間には見過ごせない違いがある。四者の哲学の核心部を比較検討しながら当時の日本哲学の議論の布置を解明する。

４．研究成果

①九鬼周造と中井正一の思想の比較研究

九鬼周造と中井正一のそれぞれの「いき」の比較を通じて二人の間の思想的関係を分析し、昭和前期における京都の美の哲学の系譜の一端を明らかにした。両者はともに「いき」を江戸期に典型的な「息」に通じる日本の文化の根本とみなした。しかし九鬼は「いき」の平行線によって隔たりを保つことを主張し、中井は「いき」を合わせて隔たりを越えて脱出し、ほんとうの自分と邂逅することを求めていた。両者の思想の間で隔たりを柔軟に調整しながらしなやかに生きていく個人の新しい共同体論を模索していくことが私たちの今後の課題であることを示した。

②九鬼周造が岩下壮一と亀代に寄せる未練の情に注目した偶然性の研究

九鬼周造の哲学のメインテーマは「偶然性」であり、それは「他の可能性もあったけれど、現実はこうなった」という認識を意味する。九鬼周造は「いき」を論じたさっぱりとした人というイメージを持たれがちであるが、彼の随筆や書簡、短歌には岩下壮一とその妹に寄せる複雑で未練がましい気持ちがうかがえる。この「未練」は過去に別の選択肢を選んでいた場合に生じる可能性を想像させるものである。未練のある人はこの現実に偶然性を認識する。しかし未練を振り捨ててこの現実を受け入れること（運命愛）は、この現実で生きるための倫理でもある。未練によって偶然性が生じてしまうので、それを運命愛の倫理によって潰さねばならない。しかしそれでも残ってしまう未練を引き受けることにこそ偶然性とともに生きる人間の姿があった。

③日本哲学の観点から檜垣立哉の哲学の研究

フランス哲学と日本哲学を専門とする檜垣立哉の哲学を日本哲学の観点から検討した。戦前の京都学派の哲学から戦後の東京の哲学まで、20 世紀の日本の哲学を論じることのできる稀有な研究者としての檜垣哲学への期待と、日本哲学の観点から考えられる檜垣哲学への批判を示した。

④九鬼周造と田辺元の哲学の比較研究

九鬼周造が京都学派主流派の「絶対無の弁証法」から距離を取った理由をドイツ哲学からの影響と田辺元の九鬼への批判の分析を通じて考察した。田辺は九鬼に対して道徳法則としての「無」の合目的性によって偶然の偶然性を否定して必然的に世界を構成せよと要求した。しかし九鬼は無に侵された有であり、いつか崩壊し、破滅するものである偶然的存在を否定しなかった。九鬼は「絶対無の弁証法」を拒んで特殊存在を肯定した。九鬼の哲学の核心は、それがどれほど苦しいことであろうとも、存在を肯定し、祝福することにあった。この「やせ我慢の美」という実践は、発展性を欠いた現状肯定でしかないかもしれない。しかし世界にはどうしようもないことがある。私たちはただその存在を承認するしかない。あらゆる存在を、それでも肯定しようとす

る「仏の本願力」を望む九鬼は、絶対無の道徳に生きる田辺とは対照的な方法で、救いようのないこの世の苦しみをしっかりと受け止めているのである。九鬼の哲学の最大の魅力は「やせ我慢の美」を掲げてあらゆる存在を寿ぐことにあることを明らかにした。

⑤中井正一の技術哲学の研究

中井哲学の技術哲学を「委員会の論理」の形成過程をたどり直しながら分析した。「委員会の論理」は彼の言語論、スポーツ論、映画論の成果を総合した中井の代表作である。中井は技術論を通じて 2 つの隔たりと 1 つの疎外を問題とした。自己と本当の自己の間の隔たり、自己と他者の間の隔たり、そして技術の高度化による大衆の疎外である。中井はこれらの疎外の原因は言語と資本主義であると考えていた。これらの課題の解決が「委員会の論理」の目標であったが、彼は討議と思索、技術と生産のサイクルの中で集団的実践を、修正を繰り返しながら取り組んでいくことを簡単に述べるに留まっているが、彼の指摘する課題は現代においても依然として解決していないものであり、彼の思想は今こそ見直されるべきである。今後中井のメディア論は虚言を退けて信頼できるコミュニケーションの可能性をめぐる議論として再解釈されると考えられる。中井が提示した問題の解決は容易ではないが、それへの指針は何も秘密にしない、正直でまっすぐな真理への意志であることを示した。

⑥西田幾多郎の「実在」についての研究

西田幾多郎の『善の研究』における「実在」についての議論を振り出しに、戦後日本を代表する私小説作家の一人である藤枝静男の小説「田紳有楽」を参照しながら、無機物と有機物が交歓する世界を自然として幻視することを構想した。

⑦九鬼周造の人間学の研究

単著『九鬼周造の人間学：破綻と再建』の出版に向けて、これまでの研究を総括した。存在と非存在の両方を肯定することを目指す九鬼の哲学を「やせ我慢の美学」や「あらゆる存在と非存在を寿ぐ哲学」として特徴づけた。

⑧海外の研究者とのネットワーク構築

2023 年 9 月にアイルランドのコークにあるユニバーシティ・カレッジ・コーク（UCC）で開催された The Seventh Annual Conference of the European Network of Japanese Philosophy への参加や 2024 年 3 月のスコットランドにあるエディンバラ大学への Academic Visitor としての訪問を通じて海外の日本哲学研究者と交流を深め、今後の日本哲学研究の国際的な発展への基礎固めを行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 織田和明	４．巻 10
２．論文標題 平行線と脱走：九鬼周造と中井正一の隔たりについての思想	５．発行年 2023年
３．雑誌名 社藝堂	６．最初と最後の頁 183-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 織田和明	４．巻 10
２．論文標題 本当の愛に背を向けても――哲学者九鬼周造の幸福	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『響流』（大谷大学任期制助教教育研究報告書）	６．最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 織田和明
２．発表標題 本当の愛に背を向けても――哲学者九鬼周造の幸福
３．学会等名 大谷大学2022年度ガクモン講座「愛とはどんなものだろう？」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 織田和明
２．発表標題 神様のいない3月3日、あるいは楽しめない偶然に埋もれて
３．学会等名 檜垣立哉教授大阪大学最終年度記念シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 ODA Kazuaki
２．発表標題 Nakai Masakazu's Philosophy of Technique: Beyond Nakai Masakazu as A Secret Committee
３．学会等名 European Network of Japanese Philosophy 7th Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計4件

１．著者名 廖欽彬、河合 一樹	４．発行年 2022年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 474
３．書名 危機の時代と田辺哲学	

１．著者名 近藤和敬、檜垣立哉	４．発行年 2024年
２．出版社 人文書院	５．総ページ数 -
３．書名 21世紀の自然哲学へ	

１．著者名 Takeshi Morisato, and Gregory S. Moss	４．発行年 2024年
２．出版社 Cornell University Press	５．総ページ数 -
３．書名 The Dialectics of Absolute Nothingness: The Legacies of German Philosophy in the Kyoto School	

１．著者名 織田和明	４．発行年 2024年
２．出版社 大阪大学出版会	５．総ページ数 -
３．書名 九鬼周造の人間学：破綻と再建	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関